尺八を人生の友として

中埜　和童（中埜　和男）

初めはトランペットから

私は中学 1 年生の時、ブラスバンド部に入り、その後、高校、大学、卒業後まで 10 年余り、青春時代をトランペットとともに過ごし、マーチ、ジャズ、クラシックとあらゆるジャンルの音楽を楽しみました。　そして、30 歳も近づいた頃、トランペットを続けるのもきついなと思っているところに、尺八のサウンドが耳に入ってきました。「やっぱり、日本人には尺八のサウンドがフィットするなあ」と感じ、尺八とジャズのフュージョンでもやってみようかと思って、四谷の童門会本部で山下慶童先生の指導を受けることになりました。

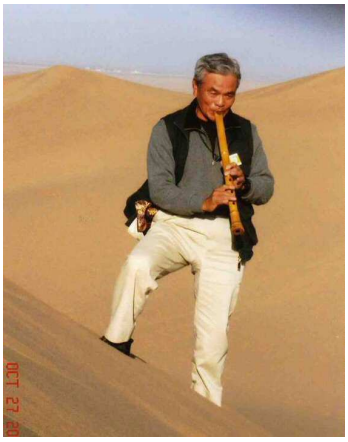
尺八を人生の友として

尺八のサウンドに魅せられて稽古を始めてから30年余になりますが、慶童先生亡き後、藤井治童先生について尺八を吹き続けています。外曲や本曲の面白さも少しずつわかってきましたが、まだまだ本物には程遠いという感を抱いています。しかし、わが人生の壮年期・熟年期を通じて尺八とはいい友達関係を維持してきたと思います。特に、単身赴任をしていた時は心置きなく尺八の稽古ができて、このままいつまでも単身赴任を続けていたいという心境でした。また定年後は楽しみにしていた海外旅行に出かけるときに尺八を持参して、人の迷惑もかえり見ず、旅の思い出に演奏をするようにしています。尺八のルーツに出会ったり、尺八を通じて外国の人達と交流できるチャンスもあり、わが友、尺八に感謝しています。

月の砂漠

友人達と一緒に敦煌方面へシルクロード旅行に出かけたときのことです。敦煌郊外の鳴沙山という砂丘に行く機会があり、ぜひ砂丘の頂上で吹いて見たいと思い、尺八を抱えて行きました。

ラクダに乗って砂丘の頂上まで連れて行ってくれると思っていましたが、麓までででおしまい、後は自分で縄梯子を伝ってよじ登ることになりました。苦労の末に頂上にたどり着き、下まで転げ落ちないよう注意しながら「月の砂漠」「シルクロードのテーマ曲」などを吹きました。本場の砂丘で尺八を吹くとピッタリとくるものを感じました。



サマルカンドで音楽交流

中央アジアのウズベキスタンへの旅行では楽しい音楽交流がありました。ブハラというイスラム教の聖都に行ったとき、シルクロードのホテル（キャラバンサライ）で民族舞踊を楽しみました。

翌朝、出発までの一時、部屋の中で尺八を吹いていると、ホテルの中庭を散歩していた妻が「外国の人が、耳が部屋に吸い込まれるように尺八を聞いているよ」と言って部屋に入ってきました。

外に出て話を聞いてみると、アメリカ人やイギリス人の旅行者の一行で、中央アジア４カ国旅行の途中だということでした。「尺八の音楽は大好きだ」ということで、私も気をよくして何故かしら高峰美枝子の「湖畔の宿」を吹いてしまい、喝采を受けました。

次に、かつてのチムール帝国の都、サマルカンドに行きました。この町は東西文明の十字路として栄えた町で、今でも中央アジアでは首都タシケントに次ぐ、人口１００万人の活気のある町です。ガイドのアレックス君が民族楽器屋さんに連れていってくれたので、店主とコラボをしました。シルクロードを行く隊商（キャラバン）の音楽を教えてくれたので、一節づつ聞いては吹き、お返しに「さくらさくら」を一緒に吹きました。律もぴったり合い、不思議な感じがしました。店主が「ウズベキスタンにも尺八と同じような「ネイ」という楽器があるのでCDを買っていけば」と勧めるので、買ってみましたが、なかなか感じのいい音楽でした。

アレックス君がサマルカンドの一番の名所、レギスタン広場で尺八を吹くよう勧めてくれたので、調子に乗って、大勢の人に囲まれて一時間ほどワンマンショーをやってしまいました。希望者には尺八を吹かせてあげ、私は皆のリクエストを受けて吹きました。ロシア民謡の他にも、ザ・ピーナッツの「恋のバカンス」をリクエストされたのに驚きました。

ネイを見つけた

トルコに行った時のことです。首都イスタンブールに到着するとすぐに昔懐かしい「ウスクダラ」のメロディーが聞こえてきました。50年以上前に江利チエミが歌って大ヒットした曲ですが、「ウスクダラ」の町はイスタンブールからボスポラス海峡を渡ったアジア側にあり、さすがに本場にやって来た感を深めました。

トルコの旅の途中、奇岩で有名なカッパドキアで尺八を吹いていると、大阪からツアーで来ていたおっちゃんが調子に乗って帽子を持ってお金集めに回りだしました。ここで儲けるつもりも無かったので、ほどほどのところで引き上げました。

みやげ物屋を覗いていると店主があの「ネイ」を持っていました。ウズベキスタンで紹介されたネイはトルコでもポピュラーな楽器であることを発見して感激しました。スケジュールが詰まっていたので値段交渉に入る時間もなく、また、多分ネイを買って帰っても、帰国後は眠らせてしまうだろうと自分に言い聞かせて、ネイによる癒し系の曲のCDを買って我慢しました。

ブータン音楽に出会う

シルクロードから少し離れていますが、ヒマラヤの山に抱かれた「幸福の国ブータン」を旅行した時のことです。ブータンは、昨年26歳で戴冠式を行った世界一若い国王を戴き、チベット仏教系のブータン仏教を信仰する素朴な国です。たまたま、首都のティンプーでは若者によるジャニーズ風のアマチュアダンスの全国大会が行われていました。どのグループも似たようなリズムの音楽をバックに踊っていましたが、素朴でほほえましい感じがしました。後で古典音楽のCDを買って聴きましたが、若者が踊っている曲は古典のものをちょっとリズミカルにしただけで、メロディーは昔も今もあまり変わっていないという印象を受けました。

帰国する前、3千メートルの断崖絶壁のところにあるタクツァン寺院にトレッキングで行きましたが、その途中の2千8百メートルくらいの展望台で記念に尺八を吹きました。

高い場所に来たせいか、一緒のツアー客から「小諸馬子唄」や「コンドルは飛んでゆく」をリクエストされ、吹いてしまいました。その後、展望台にあったみやげ物店で仏教音楽の楽器があったので吹いてみました。ラッパのような感じですが、オーボエやチャルメラと同じダブルリードの楽器でした。ここでも、楽器を買うことは諦めて古典音楽のCDを買って我慢しました。

中学校の同窓会で演奏

最近、昭和中学校（兵庫県）の卒業50周年同窓会が開かれた機会に、関東在住の同窓生でトリオを組んで押しかけ演奏をしました。50年の歳月を経て、昭和中学校は統合されて中央中学校という名前に変わっていました。バイオリン、尺八、お箏というちょっと変わったトリオですが、無事「春の海」と、この日のために書き下ろした「思い出の昭和中学校」を演奏して一応好評を博しました。

この他にも、別の機会に90歳代のおばあちゃんとコラボをし、おばあちゃんのお箏と合奏で「千鳥の曲」と「六段」を吹き、合奏の後、「庭の千草」を尺八で吹くと、おばあちゃんが歌い出しました。ものすごくきれいな声で歌ったのにはビックリしました。

これらの経験を活かしてこれからは「尺八で老人ホームを慰問したりできればいいな」とか、「そのうち慰問される方に回るのかな」とか思いを巡らせている今日この頃です。

（おわり）